



年頭のあいさつ

内田地区連合町会長 春日 睦美



平成 28 年 1 月 1 日現在

世帯数	955 戸
人口	2,441 人
男	1,219 人
女	1,222 人

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、佳き新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は地区の運営及び年間行事（三人行事の盆、運動会、文化祭など）の実施に当り、町会、公民館、福祉ひろばそれぞれの立場でご協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

特に、去る九月、松本市総合防災訓練が内田地区が主会場となり大々的に開催された折は、多くの方々にご協力いただきました。重ねて、お礼申し上げます。

訓練に参加された皆様は、災害時の対応を再確認されたことと思います。「自分の身は自分で守る」とがまず第一

一だとは思いますが、常日頃からご近所の絆を大切に、助け合いの精神を深めていただくよい機会になったかと思えます。

昨年は戦後七十周年の節目の年でもありました。また世界に目を向けると、テロや宗教戦争が勃発し、罪無き多くの人々が犠牲となつています。改めて、平和な世界が訪れる事を願わずにはいられません。

内田地区公民館は築三十年を経過し、いよいよ今年、大改修工事に取りかかります。エレベーターの新設、トイレの移設など施設の改修はもとより、出張所窓口もマイナンプール施行に伴う事務処理が大幅に変更されるなど、何かと活動も制約されるため、皆様には長期に渡り大変なご不便ご迷惑おかけすることとなりますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願い致します。

申年にかけて「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿ではなく、よく見、聞き、声をあげ、内田地区発展のため町会長九人で力を合わせ努力する所存でございます。どうかご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

拙文ではございますが、新年のご挨拶とさせていただきます。

年越しそばと二年参り

平成二十七年の大晦日。桃昌寺（古田道康住職）の境内では、除夜の鐘が鳴り響いた。雪が降る中、二年参りの参拜者が大勢やってくる。

外では、鐘を撞いて参拝した人に、抽選で大・中・小のたるまのプレゼントがあり、暖をとる火の周りは賑やかだ。



中では、年越しそばの準備で大忙しだ。この年越しそばは、奈川村のそば粉を石臼で挽き、住職と檀家の有志が約百食程を打つ。そして、訪れた参拜者に、住職の奥様が用意したおせちと共に振る舞う。もう、十五年程続いているそうだ。

幼児からお年寄りまで、次

から次へとやって来る。席が空くの待っている人たちがたくさんいた。「桃昌寺の蕎麦は旨い」と言いつつ、毎年楽しみに来ている人もいる。まったくその通りで、そんなじよそこらのお蕎麦屋さんの蕎麦より旨い。おかわりをして食べる人もいるくらいだ。

除夜の鐘の音を聞きながら蕎麦を食べ、平成二十七年に別れを告げ、新たな願いと共に、平成二十八の朝がやって来た。

四町会 前沢 しおり



今年も作りました「しめ縄と蒸しまんじゅう

晴れ渡った十二月十二日土曜日、内田公民館二階の講義室と調理室は子ども達のはしゃぎ声でたいそう賑やかでした。講義室では三町会の伊藤さんが正月に向けて、しめ縄の作り方を教えてくださいました。「手のひらで二束の縄を捻ってこうして絡ませていくだ。」丁寧な指導が「ゴボウ」の完成に子ども達もあろん、一緒に真剣に挑戦する親御さん達の声が大きく響いていました。調理室では、



子ども会育成会 会長
一町会 一ノ瀬 修一

内田地区の三九郎

内田地区では一月九日・十日に、三九郎が行われました。豊作と無病息災を願い、三百年の時を超えて連綿と伝えられている行事です。今後も、長きにわたり受け継いでいって欲しいものです。

十二月六日(日)に、内田体育館でニユースポーツ講習会が催されました。感想を掲載いたします。

今回内田で、ニユースポーツというもおもしろいがありました。まだ一度もやったことのないスポーツばかりで、最初に体を動かしたのは、ふらふらするバレーというものです。ルールはかんたんで、サーブのボールはノーバウンドでかえして、次のボールはワンバウンドしてかえす、という

ニユースポーツ講習会

ルールでした。五人でやりまがいがありました。

次には、バスケットピンポ

ンというもので、卓球台にあながあって、それにピンポン球を入れたら勝ちで、それをやったら二回連続で入ってうれしかったです。

最後はポケネットといっ



たルールでは、そろえられたら五点、入ったら一点というルールでやりまし

た。同じ場所に何度も入るといいう、キセキがおこりました。

自分が知らなかったスポーツがあったけど、スポーツをやっているうちに、なれてきて、楽しくできてよかったです。

またこういう機会があれば、参加してみたいです。

九町会 本阿 隼



つれづれ編集記

内田の春の芽吹き頃は、野山の緑が一段と映えて桜は爛漫と咲き誇り、アルプスは輝く雪の白、澄み切った空の青、仰げば空でさえさえずるひばりの声、天地自然が満ち満ちて風はやさしく頬をなでて通り過ぎます。

十年前はこの自然に恵まれた内田の地を通り過ぎるだけの山麓線でした。

五十年前の厄落としには、遙か南信から夜を徹して牛伏寺にまいりました。

参道を登る道々には、露天が居並び参詣する人々は溢れ返り肩と肩が擦れ合って、まるで東京上野のアメ横そのものでした。

往年を忍べば、今その面影はありません。二千四十年、いわゆるあと二十五経つと長野県の人口は五十万人減っていると聞きます。人が減るといいう問題は将来の年金制度が維持できないということ

です。

長野県は全国一低い結婚率。危機を訴えて様々な取り組みを行っていますが、その一つに次世代サポート課があります。分かりやすくいうと「結婚促進課」です。昔ながらの婚活サポーターを募りました。現在、県内に四百人がボランティアで若者の出会い作りの活動をしています。

当地区も、素晴らしい最高の地でありながら、若者が減って高齢化が進んでまいりました。

私ははからずも、運よくこの憧れの地に住むことができましたが、この内田地区がいつまでも発展を続け栄えることができれば最大の喜びと思っています。

六町会 北原 清吾

